

© Ryuseikaku Japan



昭和十六年八月二十日 初版第一刷
 昭和十九年三月二十日 初版第十三刷
 昭和二十三年十一月廿一日 改版第一刷
 昭和二十五年一月廿五日 改版第五刷
 昭和二十六年二月二十日 新版發行
 昭和四十五年十一月二十日 新版第五十刷

〔通版第六十八刷決定保存版〕

定價四百八十圓

著者 高村光太郎

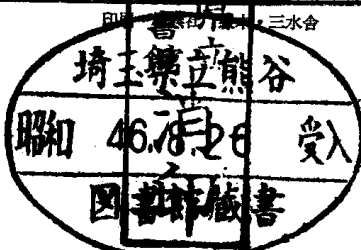
編集兼
發行者

澤田伊四郎
 東京都・九段南四ノ八ノ四

發行所

龍 星 閣

東京都・九段南四ノ八ノ三四
 振替口座東京三三三六
 電話九段(六六)九二七二



智惠子抄

高村光太郎

智惠子抄

人に

いやなんです

あなたのいつてしまふのが――

花よりさきに實^みのなるやうな

種子^{たね}よりさきに芽^めの出るやうな

夏から春のすぐ来るやうな

そんな理窟に合はない不自然を

どうかしないでゐて下さい

型のやうな旦那さまと

まるい字をかくそのあなたと

かう考へてさへなぜか私は泣かれます

小鳥のやうに臆病で

大風おほかぜのやうにわがままな

あなたがお嫁にゆくなんて

いやなんです

あなたのいつてしまふのが――

なぜさうたやすく

さあ何といひませう――まあ言はば

その身を賣る氣になれるんでせう

あなたはその身を賣るんです

一人の世界から

萬人の世界へ

そして男に負けて

無意味に負けて

ああ何といふ醜惡事でせう
まるでさう

チシアンの畫いた繪が

鶴卷町へ買物に出るのです

私は淋しい かなしい

何といふ氣はないけれど

恰度あなたの下すつた

あのグロキシニアの

大きな花の腐つてゆくのを見る様な
私を棄てて腐つてゆくのを見る様な
空を旅してゆく鳥の

ゆくへをちつとみてゐる様な

浪の碎けるあの悲しい自棄のころ
はかない 淋しい 焼けつく様な

——それでも戀とはちがひます

サンタマリア

ちがひます ちがひます

何がどうとはもとより知らねど

いやなんです

あなたのいつてしまふのが――

おまけにお嫁にゆくなんて

よその男のこころのままになるなんて

或る夜のころ

七月の夜の月は

見よボプラアの林に熱を病めり

かすかに漂ふシクラメンの香りは

言葉なき君が唇にすすり泣けり

森も 道も 草も 遠き街ちまたも

いはれなきかなしみにもだえて

ほのかに白き溜息を吐けり

ならびゆくわかき二人は

手を取りて黒き土を踏み

みえざる魔神はあまき酒を傾け

地にとどろく終列車のひびきは人の運命をあざわらふ
に似たり

魂はしのびやかに痙攣をおこし

印度更紗の帯はやや汗ばみて

拜火教徒の忍黙をつづけむとす

こころよこころよ

わがこころよ　めざめよ

君がこころよ　めざめよ

こはなに事を意味するならむ

斷ちがたく　苦しく　のがれまほしく

又あまく　去りがたく　堪へがたく――

こころよ　こころよ

病の床を起き出でよ

そのアッシシの假睡をふりすてよ

されど眼に見ゆるもの今はみな狂ほしきなり

七月の夜の月も

見よ ポプラアの林に熱を病めり

やみがたき病よ

わがところは温室の草の上

うつくしき毒蟲の爲にさいなまる

ころよ ころよ

—— あはれ何を呼びたまふや

今は無言の領する夜半なるものを——

おそれ

いけない いけない

静かにしてゐる此の水に手を觸れてはいけない

まして石を投げ込んではいけない

一滴の水の微顫も

無益な千萬の波動をつひやすのだ

水の静けさを貴んで